

挑む!

漆発祥の地に工房を構えた

阪本 修さん(39)

## 気軽な漆器 食卓麗しく

古代から漆の産地として知られた奈良県曾爾村。漆塗り発祥の地を自任するこの村に10月、工房を構えた。

寺社の調度品を制作・修理するかわら、日々の食卓で気軽に使える漆器をつくる。今や漆の国内消費量の95%

以上は海外からの輸入。「国産の存続のために何かできないか」とずっと思っていました

板を組み合わせて調度品を作る奈良市の指物師の家に生まれ、20歳のころ、父の影響で漆芸の道へ。石川県輪島



石川県立輪島漆芸技術研修所を2006年に卒業し、東京で修業。16年の奈良・春日大社式年造替で瑠璃釣燈籠（るりつりどうろう）の漆塗りを担った。

市で学び、東京の蒔絵師に師事した。

2012年に実家に工房を開いて数年、曾爾村で漆を植樹している住民と知り合った。古文書に「漆部郷」と記された漆文化を、村は復興させようとしていた。植樹に協力する中、村からの打診を受け、工房をつくることに。

漆は水や熱、酸などに強い特長を持つ天然素材。食器にはうってつけた。日常で使ってほしいからこそ、「雑貨屋にありそうで、目にとまりやすい商品作り」をめざした。

水色、小豆色、黄色……。はげ目や木目もデザインに生かし、様々な色で仕上げたコップや皿を3年前から販売している。最近では、お食い初めて使える子ども向け商品を開発中だ。

「小さい頃から漆の良さに触れてほしい。次の世代に伝えたい思いもあります」

文・写真 加治隼人

記者から

「塗り方と素材次第で表現は無数です」。赤と黒の漆のイメージががらりと変わりました。